

研究ノート

入門科目再履修クラスの運営と工夫

清水 晴 生

Management and ingenuity of introductory class for retake

SHIMIZU Haruki

1 特徴と運営

- (1) 入門科目再履修クラスとは
- (2) 教室運営の工夫
- (3) 他の授業での応用

2 課題学習

- (1) 課題の内容について
- (2) 添削

3 欠席の対応

- (1) 個別の対応
- (2) 出席が困難な学生への対応

1 特徴と運営

(1) 入門科目再履修クラスとは

大学入学者向け初年度の入門・導入科目には特徴がある。少人数の基礎ゼミを別にすれば、特に必修科目の場合には大人数となる。また学生の中には環境の変化のために落ち着きのない者や、大人数の授業、専門科目の授業にとまどい、適応するのが難しい学生も少なくない。

少なからぬ大学の中では、この種の科目に関して再履修クラスを設けている。学生の中には、再履修クラスを受講することの恥ずかしさから、出席を面倒がる学生もいるようである。他方で出席する学生も、その多くは大学での主体性に任せた授業にまだ馴染めていないか、もともと学習に対して受け身がちな学生である。大学ではじめて受けるマスプロ授業に対して、モチベーションが上がらない学生も多い。また中には、心理的な困難を抱えて出席・受講が難しいために、期末試験を受けられずに単位を落とし、再履修クラスに参加する者も一定数いる。

(2) 教室運営の工夫

入門科目再履修クラスといっても、各大学学部や学年によってもその学生たちの雰囲気には様々なものがあり、この試行錯誤の途上にある一実践報告を参考にしうるかには自ずから限界があるが、共通する部分を見出すことも可能であろう。

まずクラス運営の前提として、適正規模の教室の確保が必須である。隣と私語をしないため一席開けて座れるが、決して広すぎない教室が望ましい。後期・秋学期になってもまだ落ち着きのない一年生の、モチベーションの低い学生の集まる再履修クラスの運営の難しさから、適正な教室確保の協力を求めることが必要となる。

その上で、他の授業でも同様だが、まず私語厳禁であることをしっかりと最初の講義冒頭で学生に伝えること、場合によっては（シラバスどおり）

ペナルティを与えることを告知することは不可欠である。

こうした状況が整った上で、入門科目再履修クラスに必要と思われるのは、座席の指定である。間を一席開けた状態になるように座り直させ、次回以降もそこに着席するように申し伝える。そして後述する課題学習に学生が取り組んでいる間に、課題プリントの記入欄に記入された名前を、あらかじめ用意した簡易な座席表か、あるいは用意した白紙に簡易な座席表を書きこんだものに転記していく。

そして必ず手元の座席表で出欠を確認するとともに、できる限り顔と名前を一致させる努力をする。このような工夫により、学生の授業や大学への帰属意識を高め、少なくともその授業への参加のモチベーションを保つのにそれが資するのではないかと考える。

(3) 他の授業での応用

このような授業参加学生の顔と名前を一致させる取り組みは、そこまで大人数ではない他の授業でも応用できる。その場合には受講者が確定したあと、そのリストをプリントアウトしたものと座席表用の白紙を授業に持参し、授業中の設問等で質問する際に学籍番号と名前を呼ぶことで、座っている場所と名前を一致させて座席表に書きこみ、その際名前と顔を憶え一致させるのに役立つその他の特徴、髪型なども（差別的な表現にならないように気をつけながら）記入する。ほとんどの学生は座席指定がなくても、大概ほとんど同じ場所に座るので、授業をくり返すうちにある程度は名前と顔を一致させることができる。

このような取り組みが学生のモチベーションや帰属意識、満足度を高める効果を本当に持つかはじつはあやしい。というのも再度、別の授業で顔を見ることが非常に少ないからである。とはいえ講義科目にゼミ的な要素を一定程度加味できるという効果は、少なくとも授業を運営する側には少なからず感じられるところではあるように思われる。

2 課題学習

(1) 課題の内容について

再履修クラスではない、もとのクラスと同レベルの内容を保障しつつ、再履修クラスなりのモチベーションや理解力に見合った内容の授業をするためには、派生的な内容をできるだけ省き、各回のテーマの主要部分に絞った授業内容とすることが必須となる。

そうして厳選した内容を集約した形の課題プリントを作成し、これを授業で配布し取り組ませるという方法も、再履修クラスの運営実践の一つの選択肢である。というのも、再履修クラスの学生の中には、授業を受けるモチベーションを保つことに困難を抱えているものが少なくない。その背景・理由には本当に様々なことがありえ、一概にはいえない。いずれにしても受け身ではなく、主体的に学習する姿勢をとらせることが必要である。そのためにはただ講義を聴くのではなく、自ら課題に取り組むという形の授業が望ましい。

課題プリントを前にして、教員が机間巡視するクラスの中で、ただ何もしないていることのほうが注目されやすいため、学生はとりあえず目の前の課題の問題を読み始める。わからなくても、周りの雰囲気も影響して、とにかくプリントに目を落とす姿勢を作ることができる。教員は学生の様子に目を配りながら、適宜近寄って行って、顔と名前を確認しながら、できたところから添削し、助言し、問題の解き方や考え方を指導する。授業の冒頭には、または必要に応じて黒板を使い、前回の復習・まとめであったり、その回の課題プリントの簡単な解説を全体に対して加え、また最後には必ず全体に向けて課題の解説を行う。授業時間内で解くのに過不足ない量の課題を用意し、学生はただくわしく書き写すかまたはあっさりした解答を書きがちであるから、問題文をよく読んで、ポイントのついた答えをていねいに書くように指導する。予備の追加課題を用意しておくのもよ

いだろうが、早く終えた学生を多少待たせることにはなっても、たいていはある程度の時間が経過したところで全体への解説に移行することになると思われる。そしてそのためには、課題の中に異なる難易度の設問を適切に配置しておくことが必要となる。

また少し早めに終了することで、個別の質問を受け付けたり、学生ら（特に休みがちなど気にかかる学生）に声をかけ、その科目の課題に対する感想を聞いたり雑談をする時間を作って、学生らの様子に目を配っておくことも重要だろう。

(2) 添削

この授業形態においては、教員と学生とは1対1の関係で指導をし、また指導を受けることができる。教員は個々の学生の解答を添削する中で、大学で求められている学習や思考のあり方を伝え、それを理解させ、必ずしも難しいものではないことを少しずつでも受け入れさせて、大学での学習に対してささやかにでも自信をつけさせていくことを意識した指導をすることが望ましい。

その中で教員は、それぞれの学生の思考のスタイルや、何が得意で何が不得意かといったことを把握できるようになる。教員1人対学生全員という関係では決して見えてこない、それぞれの学生の個性がしっかりと見えてくる。それぞれの学生にどのような指導や助言が必要かを考えながら、さらに課題に取り組みせ、個別指導を実践することができる。その中で、一人一人の思考傾向や個性ばかりでなく、一人一人の顔や姿もはっきりと識別できるようになっていく。授業中や授業後に、たくさんではなくても積極的に声をかけることで、学生は大学の教員が高校までの教員と何ら変わらないという認識を少しずつでも持てるようになるのではないかと思われる。

3 欠席の対応

(1) 個別の対応

他の授業では、欠席をくり返す学生にわざわざ教員の側から連絡したりすることはあまりないのではなかろうか。入門科目再履修クラスではこれを行う場合がありうる。そのような実践を通してみると、じつは他の授業でもできる限り、本来は教員の側から連絡をとることが望ましいと感じられてくる。

欠席が多数回に及び、期末試験の受験資格を失うおそれのある学生に対しては、大学の受講生と連絡がとれるシステムなどを利用して、欠席回数を重ねていることを伝え、出席をうながす措置をとる。するとただ面倒がっていた学生の中には、出席し始める者もいる。そうした学生には、授業の際にも積極的に声をかけ、出席を待っていることを伝えるべきである。

また連絡をとる際には、欠席をくり返してしまうことに特別の理由のある者については、そのことを教員に伝えるようにうながしておくことも大変大事である。というのも学生の中には、出席したい気持ちはあるものの、高校から大学という環境の変化のために、とりわけ帰属意識や友人関係が希薄になったために、孤独になったり、不安感を増したりして、教室に入つて来られない、教室の中にいられない学生が想像以上に多くいるからである。

このような学生はこちらからの連絡に対して、自分の実情を伝えてくれる場合がある。教員は慎重な態度で、できる限りの合理的配慮を加え、また合理的配慮に基づく対応をとりうることを学生に伝えるべきであろう。その際には、学生相談室をはじめとして学内のリソースの紹介や連携についても、適宜案内することが求められよう。

(2) 出席が困難な学生への対応

こうした学生は教員や大学と連絡を保つことも難しい場合が少なくないように思われる。というのも、このような学生は自分の状況について自分

自身に責任を感じ、そのことを他人に相談したり、配慮を得ることさえ躊躇する学生が少なくないように思われるからである。そのためこうした学生は、継続的に大学の支援リソースと連絡をとり続けることをためらうようになったり、大学側の用意している支援の枠組みにまでそもそもたどり着けないままであることも容易に予想される。大学生に関しても、じつは保健室通学や図書館通学をしている学生は、思いのほか多いのではないかと感じている。

しかし高校までのように欠席を担任教師が確認・管理しているのとは異なり、大学では主体的管理に任されている。単位がとれていないという段階にならない限り、大学側から連絡が逐一行くということもないから、保護者が知るのも遅れる可能性がある。たとえ保護者が認識していた場合でも、学校・担任教師から連絡がきたり、家庭訪問されるわけでもない大学においては、学生を見守るしかない場合も多いのではなかろうか。

授業への出席や単位取得に関して、学生が学生課や学生相談室に相談に行けない場合に、学生に連絡をとることができ、学生が相談することのできる相手は、授業の担当教員にほぼ限られる。こうした学生は人間関係がやや密接になるゼミについても、参加の難しい場合が予想されるから、ゼミの担当教員が学生の状況を把握するというのも、必ずしも期待できないところがある。

つまりこうした学生は、いわばほとんど大学の誰ともつながることも、相談することもできないまま放置され、時間が過ぎ、単位のとれていない学生として大学を離れる時を待つことになる。誰でもがこうした心理的な問題を抱える可能性があり、それは自分の思いとは関わりなくふと生じることもあるものであって、これを自己責任ということではできない。したがって当然、大学は合理的配慮を、いっそう積極的な形で行うことが必要である。大学側はただいろいろなメニューを用意するだけでなく、それを本来必要とする学生が利用を申し込むところまでいけないという現実、そしていけないままの時間を過ごしているという現実を踏まえた上での配慮のし

かた、より積極的な関わり方を模索して用意すべきである。

こうした中で、少人数の講義科目の担当教員は連絡をとりうる立場にある。特に再履修クラスには心理的に困難な事情を抱えたために欠席が重なり、期末試験を受けられず単位をとれなかった学生が一定数いる。心理学的な素養や専門性を持たない教員にできることはおそらく相当に限られている。しかし合理的配慮を踏まえて、教員の側から積極的に連絡をとってみることは決して悪いことではないように思われる。それが心理的な圧迫にならないように配慮しつつ、学生がとりわけ授業への出席や学習、期末試験の受験や単位取得、ひいては学生生活全般に関して抱えている不安や、欠席に対する自責の念の解消に資するべく、ひとりひとりの学生の個性に応じた対応をとること、そのことを意識することくらいは、個々の教員にもできるのではなかろうか。

(本学法学部教授)